



芝小だより

第七月号

これからの学校生活のあり方

校長 齋藤 幸之介

梅雨に入り、気温と湿度とがとても高くなってきました。すでに夏日が数日あり、その猛暑日と言われる日が訪れると容易に推察されます。一方でぐんぐん気温が下がる日もあり、体調管理には一層留意せねば、と思っております。

このよつな折、六月一日から学校が再開されました。港区立小学校は一か月の分散となり、本校では子供たちが毎日登校することを優先し、一年生から五年生までは全体を二つのグループに分けて午前登校・午後登校という形にいたしました。子供たちにとっては、日程が目まぐるしく変わる、ととらえられたことと思います。生活リズムの確立も難しくなったことでしょうか。しかし、あるときは朝遅くなりながら、あるときは列を付け、あるときは書の中黙々と、またあるときは雨風に負けずなごうに登下校する子供たちの頑張りには頭が下がります。

当初は登校時刻について対応できない場合も見られましたが、それもいつかは解消されると確信しました。皆様には、多くの点に御協力と御理解を賜り、また登下校を始めとする子供たちの様子を見守りいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、学区内外で子供たちの安全のために御尽力をいただきました地域の方々には、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

学校再開後の子供たち分散登校に対応する姿勢から見えてくること

さて、学校が再開された後、例えば新聞には、学校について対応できない子供たちの姿が紹介されました。子供たちの様子について

発行所
港区立芝小学校
〒105-0014
港区芝2-21-3
TEL:03-3456-3072
FAX:03-3456-3071



分に配慮すべき、と伝えられました。学校に限らず、公園などの地域施設等の利用への制約が設けられたことも取り上げられ、子供たちの生活に制約があることも掲載されていました。

そんな中、教育活動を行っている私共は、子供たちに救われてきたと思っております。それは、子供たちの「たくましさ」によるものと捉えています。小児科医の榊原洋一先生は、「適応力」信じ「見守って」と題し、学校再開における保護者の心構えについて述べていらっしゃいます。榊原先生は、「生活を元のペースに戻すことを焦らず、少し時間がかかることとらえてほしい」と前置きをされながら、子供の体力を例に挙げ、「体力は環境が変われば元に戻るの心配いらないとおっしゃっています。そして、先生は「子どもを待ってあげる、必ず元に戻る」と信じてあげることと大切にしてほしい」とまとめられています(東京新聞 六月九日付朝刊)。

今までは異なる時程や守るべきことをしっかりと認識しながら、子供たちは一つの学校の場面を丁寧に行っていました。これは、子供たちがまさに学校に適応しようとしているからであり、それは子供たちに心身のたくましさがあるから、と考えますが、いかがでしょうか。

「子供たちの姿」-私共が注意すべきこと

同時に、子供たちのたくましさだけに負っていかへわけにはいきません。日本体育大学の野井真吾先生は、学校の状況を、例えば「一〇七〇マの授業や夏休みの短縮、学校行事などの中止などを例に挙げて「授業が遅れて先生方が焦るのも分かる」といながらも、「学習の遅れは、体と心が安定してから取り戻せはいい」「順番を無視して学習を詰め込めば、不安定な子どもを育てるに過ぎない」と



ことになりかねない、と指摘しています(朝日新聞 六月二日付朝刊)。改めて、私共は、子供たちの姿をできるだけ確に見取り、適切な働きかけ方を確認したいと考えています。

「ナッジ」を例に生活のあり方を考える

さて、冒頭に述べましたが、これからは真夏に向かい、夏日には猛暑日と、天候が厳しくなることが予想されます。そうすると、例えば、マスクの利用についても注意が必要になります。一方で「マスクは必ず着用」と言われながら、「マスクによる熱中症」に注意せよ、と言われたら、子供たちは迷うしかありません。解決策はどこにあるのでしょうか。

一例として、「選択」の大切さを述べている記事がありました。東北学院大学准教授の佐々木周作先生は、「ナッジ」という言葉を例に挙げています。この言葉は「ひじで軽く押す」という意味で、「制限するのではなく、選択の自由を残しつつ、望ましい方向にそっと後押しする考え方」なのだそう(朝日新聞 六月二三日付朝刊)。

国際医療福祉大学教授の和田耕治先生は、「一回取り組めば、もっと強めた方がいらいらと、でもやらなくともいらいらと、この二つが見えてくるだろう。その結果パフォーマンスの取れた対策になることを期待している」といふ。このことが、「自分を守る相手を守る思いやりのある行動」として、こんなことが出来るのか、になるとまとめられています(毎日新聞 六月三日付朝刊)。

これからは、何がよりよいかを見定め、とくに「子供たち」そのあり方や方法を考えてみるように促しながら、安定し、安心して学校生活になるように、一学期の残り一か月を過ごしてまいります。御理解と御協力の程よろしくお願い申し上げます。

